

学校周辺の概要

旧石川市は沖縄本島のほぼ中間で那覇から32km、東経127度49分、北緯26度25分の地点に位置し、南東に具志川市、北東に金武町、西に恩納村がある。石川―仲泊間は沖縄本島では最も狭小なところでわずか4km足らずとなっている。その中心を国道329号線が、山手側には高速道路が通り中南部並びに北部への主要な交通路となっている。本校はその通りに位置している。市の中心をなす市街地の東側は、太平洋に面し、北方には標高204mの石川岳がそびえ、琉球松や各種の自然植物が繁茂し、南部は海岸からゆるやかな傾斜をなし高台地となっている。上部は琉球石灰岩から形成された島尻マージと国頭れき層によって形成された国頭マージに分布される。

旧石川市は、戦前美里村の行政下にあり、字石川は戸数350戸、人口800人の美しい浜辺を前にした静かな農村であった。終戦直後、多くの避難民で人口が急増し昭和20年8月には3万人余に膨れ上がった。沖縄諮詢会（琉球政府の前身）が設置されたこともあって名実ともに沖縄の政治、経済、教育、文化の中心となり、一村落が一朝にして沖縄一の市となった。しかし次第に人口が減少し、2万2千余となった。しかし、平成17年4月1日付けをもって、石川市、具志川市、与那城町、勝連町の二市二町が合併をして『うるま市』が誕生し、那覇市・沖縄市に次ぐ人口124,051人（平成31年2月1日現在）で、公立小中学校28校を有する大きな街となった。

本校区は、都市化と農業の近代化が進み生活環境が急速に変化し、このため生徒の日常生活や教育に少なからぬ影響を与えている。個々の保護者の教育に対する関心が高く、全体として学校への協力体制は素晴らしいものがある。

平成18年7月校舎改築工事（ランチルーム、体育館を除く）がスタートし、平成19年11月に現在の校舎が完成した。

平成30年10月1日より学校に併設される県内初の保育園として「みほそ小規模保育事業所」「みほそ第二小規模保育事業所」が開所した。

平成31年5月1日より元号が、「平成」から「令和」に改元された。

歴代校長

初代（長嶺朝昂）、2代（栗国朝光）、3代（当間嗣昌）、4代（与那原憲）、5代（宮城邦男）

6代（伊波幸常）、7代（久田通明）、8代（仲間貴勝）、9代（上間一秀）、10代（比嘉盛加）

11代（宮城 清）、12代（新川秀隆）、13代（伊波義雄）、14代（當山昇進）

15代（徳本紀子）、16代（伊波正明）、17代（大城盛仁）、18代（喜屋武元一）

19代（新垣利雄）、20代（石原昌二）、21代（伊波 忍）、22代（田場 勝）

本校生徒の実態

- ① 素直で明るく、勤労・体験・奉仕活動に意欲的に取り組んでいる。
- ② 郷土の伝統文化に対する興味・関心が高く、それを取り入れた総合的な学習の時間や学校行事等に積極的な教育活動を行っている。
- ③ 全体的にはスポーツや学習面で優れた成績を修めている生徒が多い反面、学力の二極分化が進み、学習意欲の向上や基礎学力の定着を要する生徒も少なくない。
- ④ 明朗活発で人なつっこい反面、あいさつやことば遣い、身なり服装等の基本的な生活習慣の形成に課題がある。